官兵衛、村重、又左衛門重徳との友情・報恩感謝物語（1）～（6）
加藤又左衛門重徳(伊丹左衛門太夫尉重徳)と伊丹氏、郡氏、細川氏、和田氏、三淵氏、塩河氏、森本氏、茨木氏は親族

◆『急ぎお文参らせ候-寶樹院殿悲話哀話』より解説　◆
博多節信院にて購入可能 092-281-4182

「加藤又左衛門重徳画像」

黒田官兵衛、人生最大の危機、有岡城幽閉時、官兵衛を救ったことで知られる加藤又左衛門重徳(1520~1602)は、鎌倉時代御家人時代から大坂北摂・伊丹城を 400 年間治めた伊丹氏（元加賀の藤原氏・加藤）の一族。鎌倉時代に源頼朝の御家人として伊丹の邑を賜った時より一族はこぞって伊丹氏を名乗り、足利時代には将軍家の側近衆であった。1400 年代、細川家より次男を養子に迎えた時から、細川家の内紛に巻き込まれ、いつの間にか細川家に取り込まれた状態になっていたが、織田信長の台頭と共に、細川家から独立し、摂津三守護職(和田、伊丹、池田)となる。

重徳は、摂津三守護の一人・二代伊丹親興・意遁(1553～1600) の伯父・後見役として、足利将軍家の側近衆であり、 畿内で勇壮剛猛の武将として高名なキリシタン武将であった。奥方は、伊丹城主親保・一代親興(～1573)の次女・寶樹院。三男四女有り。二代伊丹親興は寶樹院の弟。親興は親子二代で名乗るが、同一人物として混同して伝わっている。重徳の妹は、細川藤孝幽斎の内室、その女子は、木下秀俊の正室（後に足守藩）、和田惟政の室は一代伊丹親興の妹、その娘は二代親興の室等、畿内の伊丹氏、和田氏、茨木氏、郡氏、塩河氏、森本氏、三淵氏、細川氏など、密接な姻戚関係により同盟を結ぶ親族として、足利将軍家を支える側近衆であった。

荒木村重、伊丹城に入城し有岡城と改名する。足利将軍・義昭、信長に反旗を翻し伊丹城落城。村重と官兵衛、又左衛門重徳との友情・報恩感謝物語（1）：

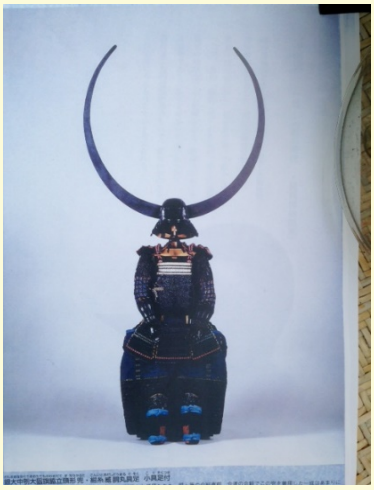
1573 年足利将軍・義昭が槙島にて破れ信長に滅ぼされた翌年 1574 年、将軍家に味方した重徳の兄弟たち伊丹氏一門は伊丹城を明け渡し、多くが荒木村重の家臣となる。村重の軍は、形ばかりに伊丹城を数度攻めたという記録有。1 年 4 か月後、伊丹親興は村重に『降伏状』を渡す。村重は信長に「伊丹城ばかりは堅固なり。ようやく伊丹城を切り取った」と報告し伊丹城に入城。信長の命で有岡城と改名する。「勝利した側の家臣となる」という荒木村重と伊丹左衛門太夫尉重徳との友情盟約が一人も傷害することなく密かに果たされたのである。

この時伊丹一族は、親興以外は鎌倉時代の本性加藤を名乗る。22 才の伊丹の頭領親興は出家し伊丹入道意遁と名乗り、友人中村式部少輔の元に客人となるが、しばらくして村重の家臣として有岡・伊丹城に戻るのである。これより加藤・伊丹・郡一門の村重への報恩感謝の念は、子々孫々代々まで引き継がれていくのである。村重と又左衛門重徳とは足利将軍家に仕え、戦場で共に戦い、京姥山のキリシタンの寺で出会い元々懇意な仲であった。

写真：黒田一成所用の鎧・荒木紋仏胴具足・個人蔵

黒田美作一成所用の鎧は、元は父加藤又左衛門重徳が荒木村重から友情の証に贈られ家宝としていたものであり、一成が 8 才で官兵衛の養子になった砌に父重徳が持たせた鎧である。村重の家紋・蔦紋が胴に有り、一成は、初期は家紋に荒木蔦紋を使っていた。のちに唐笠紋(マリア・イエス紋)に変えている。一成が官兵衛より与えられた根来大水牛脇立て兜(上記写真・個人蔵)は、代々、黒田家の当主のみに限って、与えられた兜である。官兵衛は、息子の長政と、一成に全く同じものを与えている。

「黒田美作一成所用南蛮兜」



「黒田美作一成所用・銀大兜」

それは一成が黒田家に養子として迎えられた証拠の品の一つである。養子縁組の品として、官兵衛は、「備前景光・金ののし付き鞘の小脇差」と、美しい小袖を親子の契りとして黒田玉松丸に与えたと、記録が遺る。長じた玉松丸・一成は六尺を超える巨漢であったという。

勇猛を轟かせたと伝わる伊丹衆、父・又左衛門や叔父・郡宗保、加藤任成、十一右衛門、息子左近右衛門たち、一成の兄・吉成等も、おそらく巨漢ぞろいであったろう。一族は 73 才、82 才、88 才と、皆が長寿を全うしている。

◆左記写真、黒田一成所用の南蛮兜は、三奈木黒田家の家宝の一つとして大事に保管されてきたが、朝鮮の役で奪い取った兜と代々伝えられてきたが、実はそうではないと考えられる。

室町時代、足利将軍義輝の重臣であった和田惟政は宣教師たちを最初に擁護したため、宣教師たちは和田に数々の品を贈呈している。

和田は、教えを聴かせるために、その品々を殆ど、周りの主だった武将、知人に配ったと宣教師が記録している。おそらく、和田の親族、伊丹(加藤)又左衛門尉重徳は贈呈されたその一人であり、和田からキリシタン信仰に誘われた可能性が高い。その南蛮兜が後に、一成の所用となったと考えられる。

黒田美作一成の左記の兜は、巨漢ゆえに身に着けることができたであろう豪壮で有名な兜である。関ヶ原の闘いでは、敵の遠目にも目立ち、標的にされたという圧倒的巨大さの兜である（福岡市博物館所蔵）

◆加藤睦子の戦国歴史小説「急ぎ御文参らせ候・寶樹院殿悲話哀話」は、単行本「フロイス伝・９冊」「太田牛一・信長公記三巻」「細川記」「伊丹中世史料」「平瀬加藤家文書」「三奈木黒田家文書」「郡家文書」などに、伊丹氏のこと、村重、官兵衛、高山右近、内藤ジョアンの日々、信長、秀吉などの姿がありありと記録されているが、そこからも引用して構想した小説である◆

黒田官兵衛、有岡城幽閉の真相。官兵衛人生最大の危機１年１か月の幽閉生活：加藤又左衛門重徳と伊丹氏、郡氏一門、黒田官兵衛を救う。友情・報恩感謝物語（2）

有岡城（伊丹城）の城主となった荒木村重は、その５年後、信長が次々に何万人単位で殺戮を繰り返す残忍さに、ついに「信長は天魔なり。弥陀の利剣で誅罰されようぞ」と真っ向から反抗し、ついに籠城に及んだ。信長は、村重を「日本一の大器なり」と大層信頼していただけに、何度も村重の説得に武将を送る。松井有閑、明智光秀、万見仙千代、羽柴秀吉も説得に出向くが村重は応じようとしない。反抗した者には、即皆殺しを決行するのが常の信長であるが、村重には信長らしからぬ戸惑いと動揺を見せて逡巡している。

村重とかねてから懇意であった官兵衛は、秀吉の再三の懇願によりしぶしぶ有岡城に単身乗り込むが、村重に幽閉されてしまう。これにはわけがあった。村重に届けられた官兵衛の主君・小寺政職からの書状には「官兵衛を殺害してほしい」と書かれていた。

村重は、この時すでに、本願寺顕如上人、毛利、雑賀衆等との「信長打倒、足利義昭将軍復帰」の盟約に加担していたのである。信長に追われた足利義昭将軍はその後、毛利家に匿われていた。小寺家も村重の説得に加担し、すでに１人息子を村重に人質に出していた。村重は、友人官兵衛を殺害するには忍びず、「盟約は盟約。決して知られてはならぬ」極秘として、三方が竹藪、裏は池という狭い土牢に密かに官兵衛を誰にも知られぬ方法で、籠城の１年１か月、匿ったのである。この時、村重が牢番頭として選んだ男が加藤又左衛門重徳であり、弟加藤九左右衛門(伊丹十一右衛門改め)や郡十兵衛宗保(後の秀吉秀頼の側近・郡主馬首良烈)、伊丹親興意遁(二代親興)等、伊丹氏、郡氏の兄弟や重徳の奥方たちが、軍師官

兵衛の知略賢才を慕い尊び、懇意に衣服や食事を密かに整え、しかも姫路城の官兵衛の家臣、栗山善介、井上九郎衛門、母里太兵衛たちを加藤・伊丹兄弟の家に密かに匿い忍ばせたのである。久野四兵衛重勝の祖母は、重徳の従弟・一代伊丹親興の妹という奇しき縁に結ばれた親族関係にあった。しかも重徳と官兵衛は、かねてより京・姥柳のキリシタンの寺での面識があったのである。

官兵衛は、親子ほどの年の差のある重徳の身の上話に耳を傾けることで慰められていた。互いを尊敬しあう友情が芽生えていく。重徳は、村重と官兵衛との幾度とない文のやり取りを取り持った。水面下で、重徳、村重、官兵衛、郡宗保、伊丹親興、栗山善介、井上九郎衛門、母里太兵衛等のキリシタンの友情が育まれていた。後々代々まで支え合う運命を共にする人々である。

官兵衛有岡城幽閉後、信長は激昂し「官兵衛の嫡男・松寿丸の首を即刻差し出せ」と命じる。重徳から松寿丸が殺害されたことが伝えられた幽閉中の官兵衛は黒田の後継者を失い嘆き悲しむが、官兵衛は、鎌倉時代からの名門加藤重徳の次男・玉松丸を自らに貰い受け養子にし、黒田の後継者とする約束に希望の光を見出し、本来の官兵衛の軍師としての知略が蘇ってくるのであった。官兵衛の提案は、加藤、伊丹、郡一族郎党は、籠城の有岡城より、官兵衛の姫路城へ脱出することであった。重徳と伊丹一門も互いに一条の光が射すように、生きる望みを持つこととなり、未だ信長の包囲網が及んでいない北西側より、加藤、郡、伊丹一族郎党、幼子青少年数十名も一人も残すことなく、官兵衛の姫路城へ脱出するのである。

鎌倉より 400 年間の伊丹城主一族が故郷伊丹を去る落去の時、それは信長が「蟻一匹、女、子供さえ、逃がすでない！」と包囲網を敷く数日前の危機一髪の日であった。

村重は、これを見て見ぬふりをして見守り援護していた。これより村重は、栗山善介、井上九郎衛門、母里太兵衛が土牢の裏庭の池を泳いで、官兵衛と夜な夜な密会をするようになるのも、見て見ぬふりをするのである。友情の証であった。官兵衛と村重の温かい文のやりとりはまだ密かに続くのである。

福岡県朝倉市に、官兵衛と長政の報恩感謝・友情のあかしの痕跡が！
友情・報恩感謝物語（3）

有岡城で重徳一門と村重に救われた官兵衛と長政の報恩感謝・友情のあかしが、関ヶ原合戦後に入国した筑前福岡、現在の福岡県福岡市、朝倉市、春日市、久留米市などに今もその痕跡を遺して感慨深い。

信長包囲網をかいくぐり官兵衛の姫路城へ脱出した重徳一族郎党。重徳の次男玉松丸は、いまだ幽閉中の官兵衛との約束により、黒田の継承者として迎えられた。

荒木村重が毛利の援軍を頼り、花隈状に逃れ有岡城が落城した。村重は牢の鍵を開けておくよう密偵に命じていた。

官兵衛が救われ、1 か月有馬温泉で体を癒し姫路城に戻ると、加藤又左衛門重徳の次男玉松丸は 9 歳(8 才)にして官兵衛の養子となった。しかし、実は、黒田松寿丸（のちの長政）は、官兵衛の友人、竹中半兵衛によって密かに自領・関ケ原菩提山に匿まわれていたのである。このことを知らされた信長は、驚愕し自らの非を悔いて涙を流したという。そしてすでに病でこの世を去っていた竹中半兵衛の嫡男に褒美を与えた。この話は、秀吉の慈眼の軍師二兵衛（半兵衛、官兵衛）の友情・美談として戦国時代の武将たちに、大いにもてはやされたという。

松寿丸が戻り、官兵衛に次男熊之介が生まれると、一成は黒田三左衛門と名乗り、黒田家の三男の礼を取るのであるが、後に黒田美作一成と名乗りいつの頃からか、臣下の礼を取るのである。

関ケ原後、筑前に入った官兵衛・長政親子は、黒田一成を家老とし、福岡城内下ノ橋脇の屋敷と朝倉の三奈木 1 万 2 千石を領地として与えた。後に 1 万 6 千石の大老として代々明治まで続くのである。キリシタン大名小西行長の 5 千石の家老であった重徳と嫡男加藤吉成を呼び寄せ 3 千石で弟一成の領地に隣接して矢野竹山間地帯や鵜木、嘉麻など後には、黒田騒動で失脚した栗山大膳の領地志波を与えた。また加藤吉成の死後に重徳の甥・郡正太夫慶成に 8 千 800 石で朝倉・志波を領地として与え、3 人の従兄弟たちが筑前藩の三家老として、明治まで存続するのである。他、重徳の兄弟・加藤任成へも千石級の禄が与えられ加藤、伊丹、郡一族は、官兵衛の筑前福岡を支えていくのである。

最後の伊丹城主であった伊丹親興意遁家には氏親に千石が与えられた。意遁の孫娘は、後水尾天皇の後宮として 6 皇子 4 皇女を生み、その一人が御西天皇となったことで、加藤・伊丹・郡一門は、筑前福岡にて、さらなる繁栄がもたらされる一因となっている。

博多筥崎宮の放生会にも、官兵衛と加藤又左衛門の友情、報恩感謝の証が：
友情・報恩感謝物語（４）

加藤又左衛門重徳と嫡男・吉成は、肥州宇土 24 万石・小西行長の 5 千石の家老であったが、関ヶ原の合戦で西軍の将として戦いに敗れた主君・小西行長が伊吹山に敗走し、後に家康により京都六条河原で処刑されると、行長の遺言に従って宇土城を加藤清正に明け渡した。行長の家臣への遺言は、「生きること、生きて生きて生き延びること、加藤清正に頼ること」。小西(内藤)ジョアンは、その遺言に従って、多

くの家臣を伴い、しばらく加藤清正の家臣となった。
　又左衛門重徳と嫡男・吉成の一門は、宇土城下にしばらく逼塞していたが、黒田如水(官兵衛)と養子になっていた次男一成(玉松丸)の招きにより、筑前福岡に一族郎党と共に赴くのである。如水と長政親子の報恩感謝の想いは変わることなく、又左衛門と吉成を２千石を与え温かく迎え入れるのであった。後に加藤図書吉成家は３千石の家老として明治まで続く。幕末の勤王の志として高名な家老・加藤司書は、この子孫である。
　筑前 52 万石の如水のもとに迎えられた加藤又左衛門と室たちは、しばらく朝倉市荷原の黒田一成の領地に住まいするが、福岡城築城が始まった 1 年後には、又左衛門は、博多聖福寺内に参禅潔斎の為居宅を構える。
　ある日、如水と長政が博多筥崎宮に参るという情報が入るや、又左衛門は取るものもとりあえず急ぎ、庭に自生していた新生姜を根こそぎ引き抜いて泥がついたまま、如水の元へ駆けつけたという。官兵衛(如水)有岡城幽閉時の報恩感謝の念が互いに溢れ、日がな１日筥崎宮の方丈で語り合ったという。その時の友情の証の新生姜の美談は今も語り継がれて筥崎宮放生会には、泥のついた新生姜を買う習わしが、今も続いているのである。

荒木村重、織田信長に反旗を翻した理由（わけ）：（加藤睦子・戦国歴史小説『急ぎ御文参らせ候・寶樹院殿悲話哀話』西日本新聞社発行より抜粋：博多節信院にて購入可能 092-281-4182

◆七　話　村重殿　信長に　謀反しぇらるる

智将黒田官兵衛孝高殿一人　有岡の城に説得に出向き幽閉の身とならるる
我ら伊丹一族　お世話申し候　　はる参る

　天正六年(1578)十月半ば、ついに「村重殿が、信長公に逆心」「謀反」の噂があちらこちらから信長殿にもたらさりぇ申した。信長殿わ、初め、全く寝耳に水で、をぢゃったと申す。「それわ事実でわ、あるまい。何か、気にいらぬことがあったのであろおか、考えるところがあるのならば、聞いてやろお」と、珍しい程に逡巡し、松井有閑殿、明智光秀殿、万見仙千代殿の三人が、有岡城に参らりぇ真偽を確かめてをぢゃる。信長殿、ここ六年間、強い信頼を置いてきた村重殿であった故か、信長殿らしからぬ動揺を示してをぢゃる。その時、村重殿わ、母御を人質として送るとゆう約束をば反故になしゃりぇたのでをぢゃるが、信長殿こりぇをば我慢したわ不思議。鬼畜のごとき怒り爆発寸前で、をぢゃりましたろお。

「逆心なぞ、まったく、そのようなことわ、ござらぬ」と、村重が返答したため、信長はたいそう喜び、「さしつかえなくば、出仕されよ」と使いを出したが村重は出仕しなかった。このため、信長は、即、安土から京の二条の新邸へ出馬した。村重と本願寺顕如と毛利輝元、そして十月十七日、すでに盟約の起請文が取り交わされていたのである。村重は盟約の証拠に本願寺と毛利へ人質も差し出した。毛利に匿われている前将軍・足利義昭からの足利将軍再興の書状もすでに手にしていたのである。村重は、近隣の諸将に、「信長打倒、足利将軍再興」の急ぎ書状を送り続ける。播州御着城主小寺政職その他もこの書状に賛同し盟約を取り交わした。小寺政職は、信長が荒木村重の傘下に配した男である。この時、小寺(黒田)官兵衛孝高は御着城の家老であり、信長への加担を説得していたのである。
＊　＊　＊
毛利の方から「毛利、吉川、小早川三兄弟の軍兵を後詰めとして、一月十六日には出兵」という書状が届くや、村重殿わ、一万五千騎で有岡城に篭城してをぢゃる。信長わ、村重殿にはよほど衝撃を受けてをぢゃったか、再三に渡り矢のよおに使いを出しゃれ、信長殿とわ思いぇぬほどの前例のないためらいでをぢゃった。正親町天皇を使おて「信長と講和せよ」という勅命も出しゃれたが、村重殿わ動かりぇなんだ。村重殿と親しい羽柴秀吉殿が説得にお見いぇぢゃったが動かない。秀吉殿が城を退出しゃるる時、村重殿の家臣らが「殿、今ぢゃ、今が、羽柴を殺める機で、ござろうず」とはやったが、村重殿わ、そりぇを制しぃて秀吉殿をば丁重に信長の元いぇと、戻さりぇたのでをぢゃる。村重殿わ、
「窮鳥（きゅうちょう）、懐（ふところ）に入るを殺さざるは人の心なり。」と語らりぇたと。そのことが伝わるや「荒木村重、士道の人なり」と、秀吉殿と諸将に深い印象と感銘を残したのでをぢゃる。

前野長康、蜂須賀小六が説得に遣わされた。この時村重は、二人に激しく語る。「信長殿の今までの、なしゃれよお、軍兵わ言うに及ばず、老若男女幼き子ら、か弱き女、一人残さず皆殺し忠罰の命、ただひたすらの横領殺戮（おうりょうさつりく）の数々受け入れ難し。古来、慈悲を施し憐れみをかけ、家臣や領民を慈しみ守り、共に共存共栄こそが武将の道、仏の道、でぇうすの教いぇ。かつて無き前代未聞の悪逆非道の男、天魔とわ、この御仁でござろおず。これ以上信長に着いて参れば、我らも仏罰の徒、同罪ぢゃ。同じ仏罰の徒なれば、いさぎよく散るまでぢゃ」

「あまたの法地を焼き、あまたの僧を殺害する暴悪、まことに浅まし。狼藉千万法敵信長わ、やがて弥陀の利剣にて誅戮(ちゅうりゃく)されよおぞ。
わし一人になろおとも、法敵信長の行く末を見定めてやろおぞ」と。　また「信長の家臣わ、面従腹背、表でわ服従し、裏では背を向いておること、もはや我慢がならぬ」と、語気荒く語ったという。後に自らを道糞(みちのくそ)と名乗り生き恥晒しながらも生き延びていく村重の生き様には、この言葉がその心情と強い意志を表明した武将であったと云えるだろう。
この使いの返事を聴いた信長の激昂は、押して図るべし、その後の村重一門家臣への信長の卑劣苛烈な誅罰は、まさしく前代未聞と当時の人々を震え上がらせた。　剛毅実直一途の武辺者と言われた村重、ここまでの度胸豪快さで対抗した男がかつてあったであろうか―――。

　後に信長に反旗を翻した明智光秀と村重は、親族。村重の嫡男の嫁は光秀の長女革手であったことを鑑みると、二人して天魔信長への想いを語り合った可能性も浮かび上がる。叛いたわけも不可解な不思議な謀反人二人であるが、文武両道に才能ある文化人二人の真実は、未だに謎めいている。勝者の側から伝えられた滅びた者たちへの後世の評価は往々にして全人格を否定し、手厳しく無慈悲である。後世に手紙や資料が発見され、研究が進につれ、二人の評価は変化している。荒木村重、明智光秀こそ、真に大義を生きた男二人であったのかもしれない。

荒木村重と加藤又左衛門の友情・報恩感謝物語（５）：

加藤睦子・戦国歴史小説『急ぎ御文参らせ候・實樹院殿悲話哀話』西日本新聞社発行より抜粋：

博多節信院にて購入可能 092-281-4182

　伊丹城と池田城は、目と鼻の先にある。重徳は、程なくして馬を駆って数名の伊丹衆と共に、池田城にいる村重を訪ねた。村重は、重徳の思案に率直に応えた。
「いかにも。わしとて、比叡のお山を焼いたことわ、恐ろしげであったが、坊主どもの堕落醜悪傲慢の限りわ、目にあまるものがあったでわ、ござらぬか。真の仏法の敵わ、彼らの内に有りでわなかったか。わしにわ自業自得なりとも思われまするが。わしわ、時の運、時の勢いというものがござると思いまするぞ重徳殿。今の、信長殿の破竹の勢いわ、天が、おやかた様に加担しておると見た」
　村重は、大きな目玉をくりくりと動かし、表情も太い声も明るい。
「おやかた様の並々ならぬ裁断わ、魔王天魔とも呼ばれてござるが、片や、今まで誰にも出来いぇぬ改革、才覚、閃きをお持ちのお方ぢゃと、舌を巻いており申す。一陣の風が吹き渡るごとき、あざやかさではござらぬか。わしにわ、おもしろき、わくわくするようなお方ぢゃ。そこに就いて行ってみょおと思いまするぞ。何よりも、おやかた様に加担しぇいでわ、滅びましょおぞ」
　村重の生き生きとした眼と考えは、真実を語っているようにも重徳には思えた。しかし、一方で、どうしても動かないかたくなな想いが湧き上がってくる。
「この度われらわ、足利将軍家いぇ加担いたすが、一族が滅びることわ、何としても耐いぇがたし－－。万に一、信長方が敗戦すれば、村重殿、われらが傘下に是非とも加担なされよ。万に一、将軍方が敗戦すれば、伊丹の城をば明け渡し、村重殿の傘下に従お盟約をば、受けてわ下さらぬか。一族を救う策、一生、恩に報いまする」
と、重徳は、両手をつき深々と村重に頭を下げた。村重が、しばしの沈黙後、ふっとため息をついた。
「－－－わしとて、一族が滅びることわ、耐いぇがたし－－－。良かろう、その盟約、しかと肝に銘じて戦いましょおぞ。」

＊　＊　＊

「伊丹親興画像」

　伊丹衆わ、将軍足利義昭公の『信長攻めの御内書』に、同盟加担してをぢゃる。黄色地に、丸に登り藤に加の文字紋三個の軍旗をひしめかしぇ、吾が弟・伊丹親興殿を大将に二条城へと出陣したのでをぢゃる。吾が夫伊丹左衛門太夫尉重徳さまが伊丹の大将親興殿を補佐し、吾が兄郡十兵衛宗保、重徳さまの弟・伊丹任成殿、伊丹十一右衛門殿ら伊丹衆大剛の者らも、出陣したのでをぢゃる。
　ましてや吾が父伊丹左馬入道紹臣が、「入道となっても血が騒ぐのぢゃ。信長ごときに渡してなるものか」と参戦致したわ剛毅、伊丹衆の士気を鼓舞してをぢゃった。
　丹波八木城主・内藤ジョアン忠俊さまが、銀の兜に金色のクルス輝きHISの文字がくっきりと浮かぶ南蛮兜鎧のきらびやかな出で立ちで、将軍義昭公二条城に颯爽と入ってをぢゃったと申す。無数の十字架の軍旗をはたはたと風にたなびかしぇての進軍わ、否が応でも人目を引く美しさ、きらびやかさ、諸将の軍勢の間に、「おーっ」という歓呼の声、二条のお城に

とどろく鬨(とき)の声が、あがったと申す。

　この内藤ジョアン忠俊は、重徳とはるの家族と後年、共に小西行長の家臣となるキリシタンの友である。時代の変化を読み取り速やかに対応して行く選択を、矢継ぎ早に迫られる時代の中、将軍義昭の味方をする武将たちの心には、信長打倒と、代々仕えてきた将軍家、一度仕えた主君には忠誠を尽くすという古き時代への懐古固執の想いが去来しているのである。

＊　＊　＊

　この合戦が、足利室町様終焉と、我らが四百年の伊丹城を失う大事件となろうとわ、嘆くにも取り返しのつかないあまりもの衝撃でをぢゃった。
　義昭公挙兵を知った信長わ激昂してをぢゃる。即、四月二日、将軍義昭公の二条城に軍勢を送りこみ包囲し、何とゆう浅ましさなりや、京の都の二条から七条に放火、京の都が劫火に呑まれたのでをぢゃる。
　信長のもくろみ、行動わ、迅速苛烈。天正元年(1573)四月末に、朝廷の命により信長と将軍義昭公和議。しかし、将軍義昭公負けてはならじと、二ヶ月後の七月四日再び二条城で挙兵。七月十六日、信長が槇島城(まきしま)に籠もった義昭勢を包囲し激しく熱い戦いが再び始ってをぢゃる。この合戦の最中、伊丹衆の柱であったわらわの父伊丹左馬入道紹臣が戦死してをぢゃる。
　「伊丹親興殿が戦死なしゃれたぞっ」「なんと、棟梁が討ち死にとなっ」と、
伊丹の軍兵の間に一代親興の戦死の報が波のように伝わっていく。伊丹一族と軍勢に、衝撃動揺が走る。
伊丹左衛門太夫尉重徳は、伊丹勢の戦意を落さぬよう、即、
　「伊丹親興ここにありーい、伊丹の棟梁親興ここにありーい。」と、大音声に呼ばわらせ
続けた。槇島城に放火され外郭が焼き崩れた頃に、将軍足利義昭はあわてて二歳の若君を人質に差し出し早々に降伏してしまった。伝令が二代伊丹親興と重徳の元に飛んできた。------
「義昭公、すでに降伏されてございまするっ」
「何と、すでに降伏されたかっ」伊丹衆が地団太を踏む。重徳は即、
「引くのじゃ～っ、軍を引け～っ。」と号令を下した。二代親興を補佐し伊丹城主一族の軍勢が、急ぎ伊丹城に取って返す。淀川を上り、いち早く北へ逃れた者たちもいた。
　信長の命により足利義昭は即落髪し、法名昌山と号し供の者たちも皆、沙門の姿となって念誦を手にかけて河内へ追放となった。この日、足利将軍家室町幕府は、十五代にしてついに、実質的滅亡を迎えたのである。
　次々に伊丹城に知らされる敗戦濃き戦況、伊丹の女たちは、ただ祈るしかない一日一日の中、父伊丹左馬入道の戦死と敗戦の報に城は騒然となり、女、子どもたちの泣き声が、ことさらに哀れを増す。はるは、幼き子ら四人を抱きながら気丈にも、
　「よいか、皆、落ち着くのぢゃ。これも戦国の世の習いでをぢゃる。
　　必ず、でえうすさま、阿弥陀さまが、良き道を示してくださるぞ、
　　信じて案ずるな。泣けば、泣くようなことがさらにやって来よおぞ。」と、
城内のあちこちでさめざめと泣いている侍女や子らを励まして回る。
　「大丈夫ぢゃ。だい、ぢょうぶ、ぢゃ。泣くでない。泣くで、なあ、い。
　　父上、伯父上たちに　おまかしぇあれ、
　　でえうすさまに、おまかしぇあれ。阿弥陀さまに、おまかしぇ　あ、れ。」と、
子どもたちを引き寄せ、一人ひとりを抱きしめながら優しく揺らして繰り返せば、泣いていた子らも、安堵して静かになるのであった。はるも内心は生きた心地がせぬほど、腰砕けになるほど揺らいでいたが、
　「お子らを守らねば、一族を守らねば」という想いが先に立って来る。はるは、子どもたちに安心感を持たせることに長けていたとみえる。伊丹一族の子どもらは、剣術の指南と戦況、おとぎばなしや戦記物をおもしろ楽しく読み聞かせてくれるはる伯母しゃまを、吾が母のようにも慕っていた。
　こうして伊丹一族は、宇治槇島城の敗戦により、先祖代々四百年の領地を失い、ついに没落を目前にする運命にさらされるのである。親族和田氏、茨木氏、郡氏の栄枯盛衰を嘆いた二年後のことである。

＊　＊　＊

　室町足利幕府を滅亡に追いやった信長わ、「天下布武」いぇ向けてばく進してをぢやった。
伊丹と池田の城に、荒木村重殿からの密偵と、吾が夫・伊丹左衛門太夫尉重徳さまの密偵が密かに往復してをぢゃった。村重殿の兵が、伊丹の城に何度か形ばかりに、攻め寄しぇてわ引き申した。伊丹城からわ出陣することものおて、城に籠もり、畑を耕し作物を育て、機を織り染つけをして時を過ごしてをぢゃった。伊丹城開城の準備がこの間に進んでをぢゃった。
　天正二年(1574)十一月十五日、村重殿とその軍勢が、ついに伊丹城に入城して参らりぇてをぢゃった。
槇島城敗戦から一年四ヶ月後のことでをぢゃる。吾が末弟伊丹親興二代（正興改め）が『降伏状』を村重殿に渡し、村重殿が伊丹を切り取ったことを信長に告げ、信長わ、池田城の村重殿を摂津守に任じたので、をぢゃる。
　村重殿わ、信長の命で伊丹城を有岡城と改名されてをぢゃる。
伊丹城主一族と家臣らわ一人も害さるることものお、これより荒木村重殿の傘下に従おこととなってをぢゃる。吾が夫重徳殿の一身を賭しての村重殿との盟約が、密かに無事に果たさりぇたのでをぢゃる。

こりぇより伊丹一族の村重殿いぇの感謝友情の念わ生涯忘りぇらりぇることなく、後々代々までも果たさりぇてゆくのでをぢゃる。
村重殿の傘下に下った伊丹一族わ、棟梁二十二才の吾が弟伊丹親興殿が若おして剃髪し、伊丹入道意遁と号し恭順の意を表し、駿州府中の城の中村式部少輔殿の元に、しばし逗留してをぢゃったが、ほどのおして村重殿のご厚意によりて、家臣となりて戻って参らりぇ、喜びひとしおでをぢゃった。
「我、家を継ぐの正統にして家の権与興廃を子孫に知らせずんばあるべからずと思いぇども、星を戴くほどの勤めいとまなく----。」と、その子孫が語るごとく、幾星霜、栄華と悲哀と辛苦苦労を重ぬる伊丹の正統二代親興意遁殿とその一門でをぢゃる。伊丹の残党の中にわ、村重殿に仕ゆることを拒み城を退去した者もおり、それそれに落去飛散してゆくので、をぢゃった。

朝倉市に、荒木村重と加藤又左衛門の友情、報恩感謝の証が：友情・報恩感謝物語（６）

（加藤睦子・戦国歴史小説『急ぎ御文参らせ候・寶樹院殿悲話哀話』西日本新聞社発行より抜粋：（博多節信院にて購入可能 092-281-4182）

―　急ぎ御文参らせ候
旧宇喜多家筆頭家老明石ジョアン挿部殿　新免無二斎殿迎えられ一成の采地に隣接す
伊丹親興入道意遁の遺児　伊丹氏親殿　呼び寄せに応じ筑前福岡へ参らるる
美作一成　参る　―

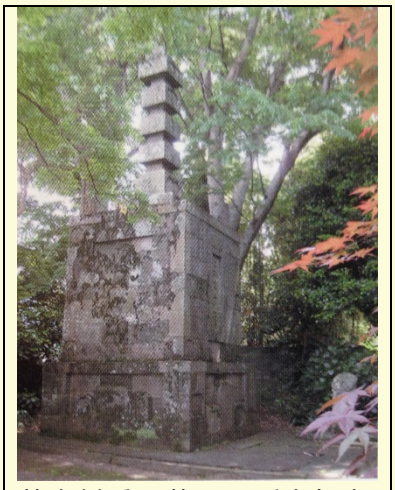
「おお、はる、伊丹意遁殿の遺児氏親殿到着されたぞ。明石挿部殿、新免無二斎殿ものお。
筑前五十二万石にふさわしゅう、他、滅びた宇喜多家の家臣明石忠左衛門殿、花房仁兵衛殿、豊後にあった竹中主膳殿なぞも、召抱えらりぇたぞ」
「んまあ、我らが慣れ親しんだ多くの方々が官兵衛如水さまの筑前に集まってお出でで。
この驚きと歓び何ともたとえよおも、をぢゃりましぇぬ。これで一安心ぢゃ。
もぉ一つ、行長さまの末子浅山さまを呼びよしぇて玉おれ一成殿。如水様にお願いして玉おれ、お願いぢゃ。
そりぇから、もぉ一つ気がかりわ、このあたりに、住まいしぇられておるとゆう荒木村重さまのお子らの消息、何とか、見つけ、い出しゃねば。又左衛門さま、何とかお手配をお願いしぃて、をぢゃる。
今度こそわ、民すべてがキリシタンとなる自由で豊かな理想郷をと、願わるる如水さまのもとで、争いの無い平和なデエウスの国が訪れましょぉぞ、の、又左衛門さま」

黒田美作一成の采地の三代官である加藤九左右衛門・左近右衛門親子、左近右衛門の長女の婿・加藤清左衛門、四女鶴の婿加藤将監やはるの三女綾の婿加藤権左衛門らが、土地の者たちへ手分けして、荒木村重の落ち延びた二人の男子と女子の捜索が始るのであった。

「大上（おかみ）さま～、おかみ様あ～っ！荒木村重殿のお子らが、おられましたぞ～っ！」
弥助が、栗尾大明神の方から叫びながら駆けてくる。それからひと月程のちのことであった。
「関白様、九州入りの折、南朝の忠臣筑後国発心山城主・草野家清殿わ落城、その折節、村重殿の遺児お二人わ城をば落去なしゃれ僧となられ、お一人わ、草野竹野村光伝寺を開基しゃれ、今に繁盛なしゃれておらるるお方が、そのお人でありまするそぉな。も、お一方の正七郎丁保殿わ、ほど近くに家臣小野五郎兵衛、阿部某、摂津某と医者に護られて、皆様ほそぼそとお暮らしであったそぉで」と、弥介が息せき切っている。
「おお、さよおか、さよおであったか、何よりぢゃ、何よりぢゃ。」と、又左衛門。
「ほんに、ほんに、嬉しぃ限りぢゃ。早速にも、お迎いぇ申して、をぢゃれ」
加藤又左衛門・はる一族にとり、かつての伊丹有岡城の主君・荒木村重との主従を越えた関わりで結ばれた御恩、決して忘れてはいなかった。
はるの次男黒田美作一成は、九才（八才）で黒田官兵衛に養子に出され、その後見役となったはるの姉ともとその夫九左右衛門夫婦を父とも母とも慕って成長し、二人から常日頃に「荒木村重殿へのご恩、夢ゆめ忘れ（わすれ）てわならぢ」と、話聞かされていたのである。
「義父上（官兵衛）が出世なさるれば、一成が采邑に引き取ることが、吾が使命」と、
一成が幼き頃から想い続けてきた村重の一子と、末子正七郎丁保は、一成が有岡城でのまだあどけなき四才から九才の間を共にした幼馴染でもあったのである。
「はる、荒木村重殿の遺児正七郎丁保殿を、一成の采邑にお迎え致す手はずが整おたぞ。下座郡水城郷下八重津の地に、一成が良き寺地を整えたぞ。これより草庵をお造り致し『荒木庵・こうぼくあん』と称して、村重殿一族の御恩、御供養に備えよぉぞ」と、
又左衛門が涙する。
「ほんに、何と嬉しぃことかな。しぇめてものご恩返し我らの歓びで、をぢゃりまする」と、はるも心から安堵するのであった。

◆はるの次男黒田美作一成は後に、荒木庵了保に寺地を寄進し寺を創建し正福寺荒木氏となった。これより黒田美作一成家と加藤家一門は毎年、吉凶・慶弔・節会毎に礼儀を尽くし、正七郎没後は毎年、墓参・供物をもって代々礼を尽くした。了保の墓は荒木庵の跡椋木屋敷にあるという。また正福寺荒木氏のすぐそば、寺の正面玄関前に、加藤左近右衛門家（又左衛門重徳・末弟の子孫）が屋敷を構え代々、平成の今にも親しい交流が行われているのである。福岡県久留米市の光伝寺荒木氏は、７～８メートルの高さに造られた荒木村重の墓を今にも代々守り、荒木村重はこの寺で終焉を迎えたという言い伝えがあるという。筑後に落ち延びたという説もあり、荒木村重の終焉に諸説があることを思えば、親しかった如水を頼り、息子の元に赴いたことも十分に考えられることである。福岡市、朝倉市、春日市、久留米市などに、官兵衛、村重、重徳の友情・報恩感謝の物語が、今にも形となって密やかに遺されているのである。

伊丹、加藤、マリア・イエス紋画像
荒木村重一族　画像



荒木村重の墓・子孫光伝寺
福岡・久留米市 草野

正福寺・福岡県朝倉市・荒木村重末子・了保の子孫

加藤又左衛門重徳と室・
寶樹院の墓　博多節信院

博多節信院・加藤又左衛門重徳と
室・寶樹院の菩提寺・加藤家

加藤左近右衛門家

加藤左近右衛門家(伊丹十一右衛門子孫・一成の後見人)
福岡県朝倉市長田

博多節信院、マリア・イエス紋手水

黒田美作一成所蔵・マリア・イエス紋・櫃
福岡県朝倉市・清巌禅寺(一成菩提寺)

この記事への問い合わせ: galleryshioh@gmail.com

HOME PAGE